

古典和歌における鐘の意象（その二）

——鐘の宗教性について——

劉 小 俊

一 はじめに

本稿は「古典和歌における「鐘」の意象（その一）——「暁の鐘」と「入相の鐘」——」⁽¹⁾と「古典和歌における鐘の意象（その二）——聴覚素材としての特徴——」⁽²⁾の続稿である。前二稿において、中国古典詩歌の分析によく使われる「意象」という概念を借用して論を進め、（その一）においては、鎌倉時代までに成立した歌集に見られる鐘を詠み込んだ延べ二六一首の和歌の検証を通じて、「入相の鐘の意象には主に無常感が含まれている」のに対し、「暁の鐘は大自然の景色や現象を連想させ、その意象に早朝の清々しさと静けさが看取される」という結論を得た。また（その二）においては、新たな資料を加え、和歌における語の取り合わせと意象の組み合わせという二つの側面から、鐘と鹿、鐘と風の組み合わせの検証を通して、鐘がほかの聴覚素材と一緒に歌に詠み込まれることによって、二重ないし三重の音響効果を作り出し、歌の本来の趣を引き立てるという和歌の聴覚素材としての鐘

の特徴を論じてみた。

しかし、鐘を論じる時、元來仏教法具として日本に渡来してきたと言われる鐘の特質を看過してはならないと思う。坪井良平氏著『日本の梵鐘』によると、日本における最初の「純然たる非宗教の用途の鐘」は戦国時代が終わって各地に諸侯が築城した際に造られた「城鐘」であり、最初の報時鐘は寛永十一年（一六三四）に造られた「大阪町中鐘」だと言⁽³⁾う。となると、それ以前の鐘——その響きが歌人たちの心をとらえ、数多くの和歌に詠み込まれたのは、いずれも宗教ゆかりの鐘だったと言っても過言ではあるまい。鐘Ⅱ寺院Ⅱ仏教というのが当時の人々の鐘に対する認識だったのではなからうか。本稿は鐘のこのような特質に注目しつつ、鐘の宗教性がどのように古典和歌に反映されているのか、言いかえれば宗教性という側面から鐘の意象を論じてみたいと思う。

二 迷夢を覚ます鐘

をんなのもとにてあか月かねをききて

小一条院

あか月のかねのこゑこそきこゆなれこれをいりあひとおは
ましかば

(『後拾遺和歌集』雜二・九一八)

この一首について新日本古典文学大系『後拾遺和歌集』(岩波書店)は、「住吉物語・上に、女君の乳母子侍従と主人公の少将の連歌として」この歌がある⁽¹⁾と指摘しているが、この歌に関する『袋草紙』の次のような記述には言及していない。

ある人云はく、「これは連歌なり。院、暁に帰り給ふとて、

口ずさび給ひけるに、末は女の申しけると云々。ただしまた

旧説には、この歌によりて罪業甚だ重きの由と云々。しかれ

ば皆院の御作か。

(『袋草紙』巻上)

連歌かどうかはさておき、暁の鐘の音を聞いて、これを恋人に逢う時刻を告げる入相の鐘の音に思えたらと願う気持を歌ったこの歌が、なぜ「罪業甚だ重き」と言われたかに注目したい。中村元著『仏教語大辞典』(東京書籍)には、鐘は「寺院において、みなに合図するために打つ」とあるが、唐百丈山懷海法師著『勅修百丈清規』法器章には「曉撃は即長夜を破り睡眠を警む、暮撃は即ち昏衢を覚し冥昧に疎す」とある。⁽²⁾すなわち、寺院の鐘の音は各行事の時間などを知らせるほか、朝夕の鐘の音は衆生の迷夢を覚まし、種々の煩惱や悪業から離れるように戒めるものというのである。しかし、前掲の歌の作者はこのような戒めの鐘の音を聞き、罪業を悟るところか、五戒で戒める「邪淫」とも受け取られる女との逢瀬の合図だったと願うのであって、「その姿に

仏教でいう罪の重さを認めたもの」なのである。⁽³⁾『袋草紙』の「罪業甚だ重き」云々はこのような鐘の効用を踏まえた言葉であるに違ひなく、当時の人々の鐘に対する認識の一面を反映していると考えられる。

鐘の音に含まれているこのような意味合いが古典和歌に反映され、鐘の音は人々を現世の迷夢から覚まし、仏教の境地を悟らせるものとして詠まれる場合がある。紙幅の関係でここには勅撰集を中心に次の三首を挙げておく。

藤原宗経朝臣

暁のかねぞあはれをうちそふるうき世のゆめのさむるまくら
に

(『新勅撰和歌集』雑歌二・一一七四)

題しらず

後京極摂政前太政大臣

山寺のあかつきがたのかねのおとながきねぶりをさまして
しか

(『純後撰和歌集』雑歌中・一一二二)

夜法文を清談するに、時うつりゆきて後夜のかねをき
きてよめる

高弁上人

のりのこゑにききぞわかれぬながき夜のねぶりをさますあか
つきのかね

(『玉葉和歌集』釈教歌・二七二六)

「ながきねぶり」「ゆめ」とは俗世の煩惱に執着してその無常を悟らず、まさに迷夢に陥っていることを指すものと思われる。鐘はそのような人々の迷う心を払い、仏の悟りに目覚めさせる「し

るべ」となっているのである。同類の歌は『秋篠月清集』『拾玉集』『夫木和歌抄』『山家集』等にも見られるが、また鐘は迷夢から目覚め無明長夜が明けたことを告げる「うれし」い音としても詠まれている。

かねのおとをききて

僧都源信

あかつきのかねのこゑこそうれしけれなきうきよのあけぬ
とおもへば

（『統古今和歌集』釈教歌・七五五）

この歌は憂き世の無明長夜が明け、やっと人を真に目覚めさせる「うれし」い音として鐘を捉えている。「かなし」や「あはれ」などの語を伴って詠み込まれる用例が多い中で、鐘の音を直接「うれし」と詠むのは極めて異例であり、管見の限り他に用例を見出しがたい。

鎌倉時代までに成立した歌集のうち、このような「迷夢をさます」意味合いを持つ鐘の用例は、延べ一五首ほど見られ、決して多いとは言えない。しかし元来、仏教法具である鐘の特質を考えると、これらは古典和歌における鐘の意象を分析するに当たって見逃すことのできない一群の歌であるとともに、いずれも鎌倉時代に入ってから成立した歌集に収められている点にも注目したい。鐘の音で「長き夜も明けぬ」と詠まれる歌は『千載集』にも見られるが、本稿の四で述べるように、それは死者を哀悼する歌であり、右に挙げた歌のように現世に生きる人々が常住の極楽往生のため、無常の「浮世の夢」を覚まし、仏道に目覚めるという前掲

の歌とは趣を異にしている。したがって鐘の意象に含まれている「迷夢を覚ます」、あるいは「警鐘」とも言えるきわめて宗教的な一面は、鎌倉時代に入ってから現れたものと考えてよいのではなからうか。

では、鎌倉以前においては鐘の意象に含まれる「警鐘」という一面がなぜ現れなかったのか。それは平安時代後期から流行した末法思想や浄土信仰の隆盛と密接な関係があると思われる。周知のとおり、末法とは釈尊滅後、正法、像法を経てからの第三時期であり、仏法が衰滅する時期とされている。大野達之助氏によると、平安後期まで末法思想は知識としてしか意識されておらず、人々はまだ深刻な厭世思想を抱いてなかった。しかし、摂関政治から院政の時代にかけて、律令体制の崩壊、地方に起きる反乱、都付近での興福寺と延暦寺の衝突など、政治・社会が不安定になり、治安状況も悪化する。このような状況の中で、「貴族も民衆もようやく末法の世が到来したという実感をもつようになった」のである。一方、九世紀半ば頃から貴族階級に起こった浄土信仰は、はじめはそれほど悲観的なものではなく、特に摂関政治の最盛期、貴族文化の中ではむしろ「審美的な現世的」であつたとも言われている。しかし、前述のような社会状況になると、人々は無常の人生を離れ、常住の極楽浄土に往生したいと願うようになり、浄土信仰も厭世的な厭離穢土・欣求浄土の極めて悲観的な特色を持つようになる。一一七五年に法然が比叡山を離れて浄土

宗を開立し、阿弥陀仏の本願を信じ、もっぱら阿弥陀仏の御名を唱えて西方の極楽浄土に往生することを説いた。その教義は貴族階級のみならず、僧俗、老若男女の別なく広く浸透していった。ほぼ同じ時期、人々は戦乱に苦しみ、生離死別の苦を味わい、民衆は現世の苦界から逃れようと、極楽浄土に救いを求め、浄土信仰が一層深まったと思われる。「無明長夜、この世は極楽浄土に生まれ変わって、真に目覚めるまでの、暗闇の眠りに過ぎぬ。称名念仏を怠らぬ者のみが、来世に望みを持ち得る。この徹底した悲惨なベシミズムの上に成り立つのが、当時の仏教」であつたといふ。言いかえれば、救いを求めるなら、まず現世の「迷夢」を目覚めさせねばならない。このような仏教観が和歌に反映し、鐘の意象に「警鐘」の一面が現れるようになったものと考えられるのである。

しかし、鐘を詠み込んだ古典和歌に見られる宗教性は決して「警鐘」に限らず、鎌倉時代から始まったものでもない。厭離穢土・欣求浄土の根本につながる「無常感」がはやくも平安時代から多くの歌に反映されており、鐘、特に入相の鐘に「無常感」の意象が含まれていたことは、すでに「古典和歌における「鐘」の意象」(その二)——「暁の鐘」と「入相の鐘」で述べた通りであるが、これらの歌が感受性豊かで感傷的であるのに対して、「警鐘」の意味合いを持つ歌は理性的で、無明長夜の夢から人々を目覚めさせるという積極性が認められるのである。

三 鐘と釈教歌

以上「迷夢を覚ます」という角度から鐘の宗教性、言いかえれば鐘と仏教の関連を検証してみたが、宗教性を論じるなら、釈教歌の存在を無視することはできない。そこで本節では、釈教歌における鐘を詠みこんだ歌の存在とあり方について考えてみたいと思ふ。

本稿を作成するために新たに調査し直したところ、『古今和歌集』と『後撰和歌集』に用例が見られないのは、前回の調査結果と一致するが、『続後拾遺和歌集』までの十六代集所収の鐘を詠み込んだ歌は一〇〇首存し、前回の六〇例より四〇例も増えている。そのうち「かね」という仮名表記の用例が七四首、「鐘」という漢字表記の用例が二六首ある。部立別の歌数を示せば、春部四首、秋部九首、冬部八首、哀傷部五首、羈旅部四首、恋部十六首、雑部五十首、釈教部四首となる。雑部の全体の半数を占める五十首に対して釈教部には四首しか入っていない。仏教法具としての鐘の特質から考えれば、一〇〇首中の四首という結果に意外な念を抱くのも無理はなからう。

釈教歌の定義について、『岩波仏教辞典』(岩波書店)には「広く仏教に関する和歌全般を指している」とあり、「仏教的な内容を込めた」歌はやくも『万葉集』に見られると付け加えている。この解説に基づけば、今まで論じてきた「無常」や「迷夢を覚ま

す」意味合いを持つ鐘を詠みこんだ歌も釈教歌と見なしてよいと思われ

る。実際、釈教部が明確に部立されていない『千載和歌集』

以前の一部の歌を釈教歌と見なすのは、今日ではむしろ一般的な

見方であろう。鐘を詠み込んだ歌のみに関して言えば、釈教部が

部立されていない歌集はともかくとして、『千載和歌集』以後の

各勅撰集に釈教歌と見なされてもよい歌は多く存するのに、釈教

歌部には四首しか収録されていないというのはなぜなのか。この

疑問を解くにあたつては、釈教歌の内容と本質及び鐘の聴覚素材

としての特徴という二つの方面から考えなければならぬと思う。

久保田淳氏の「法文歌と釈教歌」によれば、釈教歌は「経旨歌・

教理歌・法縁歌・述懐」の四種に分けられていたことが分かる。

『千載和歌集』から『続後拾遺和歌集』までの各勅撰集の釈教部

に収められた歌を検討してみると、仏教經典から抜き出した要句

や經典そのものを歌題にして、その内容を詠むいわゆる経旨歌及

び教理歌・法縁歌が大多数を占めていることが認められる。たと

えば『新勅撰和歌集』と『玉葉和歌集』には、それぞれ次のよう

な歌が収められている。

法橋行賢

つくづくとくるるそそこそかなしけれあすもきくべきかねの

おとかは

（『新勅撰和歌集』雑歌二・一一八〇）

前参議雅有

あだなれどけふの命もあり過ぎぬいつをかぎりぞ入相のかね

（『玉葉和歌集』雑歌二・二一四四）

この二首はどちらも無常を詠んだ歌で、「広く仏教に関する和

歌」という定義に照らせば釈教歌であり、その中の述懐歌に当た

ると思われる。しかし二首はいずれも釈教歌部ではなく、雑歌部

に収められている。これらの例から、勅撰集の釈教歌部には、主

に経旨歌などの歌を収録し、釈教歌中の述懐歌を除外する傾向の

あることが窺われ、釈教部の歌の内容が自ずから制限されたもの

になっていると言えよう。そのため、本稿の二で挙げた用例を含

む多くの「仏教的な内容を込めた」述懐の釈教歌が、釈教部では

なく他の部立、特に雑歌部に多く収録されることになったと考え

られるのである。

内容のみならず、釈教部に収録される歌は、本質上他の歌と異

なるところがあるように思われる。初めて釈教歌を明確に部立し

た『千載和歌集』巻十九の巻末、律師永観の歌の詞書に「わうじ

やうかうの式かき侍りけるとき、きやうけの歌とてよみ侍りける」

とある。「きやうけ」を漢字表記すれば「教化」であり、人を教

導化育するという意味である。つまり、釈教部の歌は、作者の見

たこと、感じたことを素直に表現することより、和歌をもつて仏

道に資し、人々を教化する目的を持っており、功德主義の傾向が

顕著である。経旨歌を主な内容とする上、このような本質を持つ

釈教部には、叙情的な歌より概念的な歌が圧倒的に多いという特

徴が見られる。

一方、鐘の和歌の聴覚素材としての特徴を考えると、概念的な歌に向くとは考えにくい。鐘が歌人の心を捉え、さまざまな感情を呼び起こすのは、その悠長かつ神秘的な音色であり、そのような音色なくして鐘が存在する意味はないと言っても過言ではない。そのため、経旨歌のような内容があらかじめ決められた歌を詠む場合、聞こえてもいない鐘の音は素材として取り入れにくかったのではあるまいか。

此日已過 命即衰滅

寂然法師

けふすぎぬいのちもしかとおどろかす入途の鐘のこゑぞかなしき
（『新古今和歌集』 釈教歌・一九五五）

あかつきいたりて、浪のこゑ金の岸によするほど

皇太后宮太夫俊成

いにしへの尾上の鐘ににたるかな岸打つ浪のあか月のこゑ

（『新古今和歌集』 釈教歌・一九六八）

かねのおとをききて

僧都源信

あかつきのかねのこゑこそうれしけれながきうきよのあけぬとおもへば
（『続古今和歌集』 釈教歌・七五五）

夜法文を清談するに、時うつりゆきて後夜のかねをき

きてよめる

高弁上人

のりのこゑにききぞわかれぬながき夜のねざめをさますあかつきのかね
（『玉葉和歌集』 釈教歌・二七二六）

右に挙げたのは『続後拾遺和歌集』までの勅撰集の釈教歌部に

収録されている鐘を詠み込んだ用例の全四例である。そのうち後の二例は述懐歌と見られるが、前の二首は経旨歌と言えよう。述懐の二首は明らかに鐘の音を聞いて詠んだ歌に対し、『新古今和歌集』一九六八番の歌は異なると思われる。この歌は美福門院に求められて藤原俊成が詠進した極楽六時讃の中の後夜讃であり、『金の岸』は極楽の黄金の池の岸を指す。極楽の黄金の池の波の音から現世の尾上の山寺の鐘を思い起こすという感動的なこの一首にしても、実際に鐘の音を聞き、その音色に感激して詠んだ歌ではないと思われる。また、同じ『新古今和歌集』の一九五五番の寂然法師の歌は「法文百首」の無常の部の一首であり、『六時無常讃』の教えを「入相の鐘の音で実感としてかみしめさせられた悲しみで詠んだ作」と評されている。しかし、入相の鐘によって無常を実感して悲哀や感傷の心情を歌った例は、『拾遺和歌集』や『和泉式部集』などにすでに見られ、寂然法師の歌はそれらを意識して詠んだ可能性もあり、この歌も俊成の歌と同様、実際に聞こえた鐘の音に触発されての詠作とは言いついては切れない部分があると思う。つまり、この二首の歌に詠み込まれている鐘は感性的な鐘の音ではなく、仏教と関わりのある概念上の鐘と考えるとよからう。このような音色を伴わない概念上の鐘は、釈教部に収録されている鐘を詠みこんだ歌の一つの特徴であり、また釈教部に鐘を詠み込んだ歌が少ないのも、そのことと決して無縁ではあるまい。総じて言えば、十六代集所収の鐘を詠み込んだ歌一〇〇首の中

には、「仏教的な内容を込めた」意味から釈教歌と見なされる歌が決して少なくないが、釈教部に四首しか見られないのは、釈教部の歌の内容と本質、また鐘の聴覚素材としての特徴という三方面に原因があると考えられる。結果的には、釈教部に収録されている鐘を詠み込んだ歌は、同類の歌の中の極少數のものという勅撰和歌集の釈教部の特徴が看取されると思う。

四 「鉦」の存在

本稿の二と三のほか、「古典和歌における鐘の意象」(その一)と(その二)においても、筆者は鐘を詠み込んだ数多くの歌を検証してきた。これらの歌に詠み込まれている鐘は、種類から言えば、すべて寺院の鐘楼に掛けられ、毎日定時に撞かれ、その悠々たる音が遠くまで響き、人々のさまざまな思いを誘う鐘である。しかし、鎌倉時代までに成立した歌集に見られる「かね」の用例の中に、次のような注目すべき一群の歌が存するのも事実である。論を進める便宜上、各歌に一連番号を付した。

廿八日野辛法印 良守四

十九日諷誦文 誦經物砂金一両

書副之

- ①うき夢の別路に送る鐘のおとはさむるさとりしるべともなれ

(『為家集』一七三九)

人の四十九日の誦經文にかきつけける

よみ人しらず

- ②人をとふかねのこゑこそあはれなれいつかわがみにならむとすらん
(『詞花和歌集』雑下・四〇六)

人のわざしける導師にて誦誦文よみ侍りけるに、うたの侍ればよみ侍りける
慶範法師

- ③うちならすかねのおとにやながき夜もあけぬなりとはおもひしらん
(『千載和歌集』哀傷歌・五七七)

花園左大臣家にわらはにて侍りけるを、をしへ侍るとてたまへりける笛を、年へてのちかのためにほとけ供養し侍りける時、笛にそへて侍りける
法印成清

- ④おもひきやけふうちならすかねのおとにつたへしふえのねをそへんとは
(『千載和歌集』哀傷歌・五九七)

隣寺に誦經のかねのきこえければ

天台座主澄覚

- ⑤ひとこゑのかねのおとこそあはれなれいかなる人のをはりならん
(『純古今和歌集』哀傷歌・一四七一)

つねにもたりしてばこ、おたぎに誦經にせさすとして、かきつくる

- ⑥こひわぶとききにだにきけかねのおとにうちわすらる時の間ぞなき
(『和泉式部集』四八〇)

これを聞きて、僧都の母、いかがとひとりければ
⑦つくづくとおつる涙にしづむともきけとてかねのおとづれし

な

〔和泉式部集〕四八一

僧都教智ゆかりありて、としごろしたくて侍りけるが、
うせて後四十九日のわざしけるじゆきやう文に書付け
ける

⑧きみをとふ鐘の声こそかなしけれそれぞ音する果てぬと思へ

ば

〔清輔集〕三五〇

また、『隆信集』に「ははのかのぶくきられし日」云々の記述（三
九四の詞書）の後、関連する歌が収められた中に、以下の四首が
ある。

僧正範玄のもとより、五十日すぎて

⑨かぎりあればとぶらふかねもおとたえてむかしの跡やいちぢ

かなしき

〔哀傷・四〇六〕

かへし

⑩いまはただよなよひとりねざめしてさもあらぬかねのおと
のみぞきく

〔隆信集〕哀傷・四〇七

つぎのとしのはてに、仏事せしに、さだいへのあそむ
のもとより

⑪さても猶ただけふまでをなごりにてかねの音さへつきやはて
ぬる

〔四二一〕

かへし

⑫けふまでやかぎりと思ふかねのおとなはつきせぬはなみだ
なりけり

〔四二二〕

右に掲げた一二首の詞書から判断すれば、これらの歌に詠み込
まれている「かね」は、亡き人のために行われる法事の時に鳴ら
す「かね」と思われる。⑤の歌の詞書にある「誦經のかね」とは、
「誦經の時間を知らせる鐘」とも解釈できないことはないが、「い
かなる人のをはりなるらん」という下二句から、この「かね」は
亡き人のための誦經の「かね」と判断できよう。となると、この
一二首中の「かね」は、今まで検証してきた多くの歌に詠まれる
空に響く鐘とは異なる種類の「かね」と言わねばならない。

仏教辞典等によれば、「かね」には僧侶の招集や、寺院内の行
事の時刻を知らせる時などに使われる鐘と、誦經や法事の時に叩
き、厳密には「鉦」という漢字で表記されるべきものの二種類が
ある。例えば、『織田佛教大辞典』（大蔵出版株式会社 昭和四九
年）には、「カネ 鐘」と「カネ 鉦」の二項目が設けられており、
「鉦」の項には「法事の時、合図に叩き、又念仏を称ふに叩く」
とある。また、『総合佛教大辞典』（法蔵館 一九八七年）の「鉦
打」の項には「鉦を首にかけ、和讃念仏を唱え、踊念仏などをし
た半僧半俗の徒」という一文が見られる。鉦打をするのがどのよ
うな人なのかはさておき、「首にかけ」ということから、鉦は
かなり小さなものだと思像できよう。さらに小学館『国語大辞典』
にも、「たたきかね〔叩鉦・敲鉦〕 仏具の一つ。念仏にあわせて

たたきならす鉦。」の説明がある。三つの解説を総合すれば、「鉦」とは法要や誦経の時に合図をしたり、誦経に合わせて鳴らしたりする小さなかね」のことである。この定義に照らし合わせて考えると、右に挙げた二二首の歌に見られる「かね」は「鐘」ではなく、「鉦」と見なすべきことは明らかであろう。実際、「鐘」という漢字で表記されているものの、②「詞花和歌集」四〇六番と③「千載和歌集」五七七番の歌の「かね」について、新日本古典文学大系本（岩波書店）にもそれぞれ「誦経の時に叩く鐘」「追善供養の誦唱の中で打ち鳴らす鐘の音」という注記が見られる。

「鐘」の本来の用途は何であれ、事実上、日常の中において、鐘の音が常に純然たる宗教的なものとして人々に受け取られることとはないように思われる。寺院の境内を超え、遠くまで響く長い余韻を持つ鐘楼の鐘の音は、人間の世俗的な生活と深く関わり、あるいは時刻を告げる報らせとなり、あるいは旅人の道しるべとなり、あるいは周りの静寂を感じさせる音となり、人々のさまざまな思いや感情を呼び起こす。すでに述べたように、「鐘」の意象には哀傷や寂しさ、無常や孤独、早朝の清々しさと静けさなどが含まれているほか、⁽¹³⁾「恋歌」では恋人たちの喜びや悲しみを表すのにも使われている。つまり、古典和歌において、「鐘」はさまざまな題材の歌に幅広く詠まれ、その意象に複雑さが看取される。しかし、これに対して法事、誦経の時にしか鳴らさず、聞こえる範囲も限られている「鉦」は、人々の日常生活からはややか

け離れた存在となっており、その意味で「鐘」よりも「鉦」の方がより純然たる宗教性を持っているとも言えよう。そのためか、鎌倉時代までの「かね」を詠み込んだ三〇〇首余りの歌のうち、詞書や歌の内容からはつきりと「鉦」を詠み込んだ歌と判断できるのは、ほぼ右の一二首くらいかと思われるのである。

鉦を詠み込んでいる歌についてはその数が少ないばかりでなく、その意象も極めて単純で、いずれも死者への思念や哀悼の意を込めた歌である。②は亡き人を叩く鉦の音からわが身のことを思い、悲観的な歌に仕立てられているが、これに対して③は、打ち鳴らす鉦の音によって亡き人の無明長夜もようやく明けたという積極的な姿勢で死者への思いを詠んでいる。特に⑥と⑦には、作者和泉式部の亡き娘への恋しさが詠まれており、子供を亡くした母の深い悲しみがひしひしと伝わってくる。このように鉦の意象には自ずから「哀惜」が含まれていると言える。

以上述べてきたように、「かね」を詠み込んでいる歌のうち、「鉦」の数は微々たるもののようで、その意象も分析されるほど複雑なものではない。しかし、古典和歌に詠まれている「かね」はすべて同種類のものではなく、我々になじみ深い「鐘」のほか、「鉦」も詠まれていることを見落としてはならないである。

五 おわりに

本稿は「迷夢を覚ます」鐘、釈教歌に見られる鐘および鉦を詠

み込んだ歌を取り上げ、鐘の宗教性について考察した。最後に余談となるが、四に挙げた④の歌は、追善供養に鳴らす鉦の音に笛を合わせ、音楽による死者への追悼を詠んでおり、鉦の持っている音楽性の一面を見せている。同様の歌はもう一首、慈円の『拾玉集』に「中将出京之朝、少生など管弦などしてかへりてのち、申しつかはしたりし」という詞書の後、五三二八番の歌は「びは、五三一九番の歌は「こと」を詠んでいるのに続き、あはせつたがはぬかねの声々にうちつけなりしわがころかな（『拾玉集』五三二〇）」という歌が収録されていることを言い添えておく。

注

- (1) 『岡大國文論稿』第30号（平成十四年三月）に掲載
- (2) 『解釈』第四十九卷 三・四月号（平成十五年四月）に掲載
- (3) 『日本の杜鰐』（坪井良平著 角川書店 昭和四十五年三月三十一日）
- (4) 『後拾遺和歌集』（新日本古典文学大系 岩波書店 一九九四年四月一〇日）
- (5) 『真宗大辞典』による（永田文富監 昭和四十七年一月一日）
- (6) 『袋草紙』（新日本古典文学大系 岩波書店 一九九五年一〇月三〇日）
- (7) 『新編日本仏教思想史』（大野達之助著 吉川弘文堂 昭和四十八年五月一〇日）
- (8) 同（7）

- (9) 「無常の美学・新古今和歌集」（塚本邦雄 岩波講座「日本文学」と仏教 第四卷 無常」 岩波書店 一九九四年二月二五日）
- (10) 「岡大國文論稿」第30号に掲載されている同拙稿を参照
- (11) 「法文歌と釈教歌」（久保田淳 岩波講座「日本文学」と仏教 第六卷 経典」 岩波書店 一九九四年五月三〇日）
- (12) 「新古今和歌集」（元訳日本の古典 第三十六卷 小学館 昭和五十八年二月二五日）
- (13) 拙稿「古典和歌における「鐘」の意象（その一）——「暁の鐘」と「入相の鐘」——」を参照（『岡大國文論稿』第30号 平成十四年三月）

〈テキスト〉歌の引用及び歌番号は『新編国歌大観』、『袋草紙』の引用は新日本古典文学大系（岩波書店）によった。

（りゅう しゅうしゅん 京都女子大学非常勤講師）

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅱ

- 大阪樟蔭女子大学 日本語研究センター報告（大阪樟蔭女子大学日本語研究センター） 十一
- 大阪大学 日本学報（大阪大学大学院文学研究科日本学研究室） 二二
- 大谷女子大学国文（大谷女子大学日本語日本文学会） 三三
- 大妻国文（大妻女子大学国文学会） 三四
- 大妻女子大学紀要——文系——（大妻女子大学） 三五
- 岡山大学国語研究（岡山大学教育学部国語研究会） 十七